

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*¹ 知的活動には三つの種類が考えられる。

(1) 既知のことを再認する。以下、これをAとする。(2) 未知のことを理解する。これをBとする。(3) まったく新しい世界に挑戦する。これをCとする。

これを読むことに関係づけて考えると、すでに経験して知っていることが書かれている文章を読んだときがAに当たる。よく知っている土地のことを書いた文章を読んだり、実際見知っているスポーツの試合についての記事を読んだりするとき、その理解はこの再認になる。

読む側に、知識あるいは経験が先にある。そのあとから、同じ、^⑥ よく似た知識があらわれる。両者を関係づければ「わかった」という自覚になる。もっとも基本的な認識の形式であるけれども、これだけでは既知のことしかわからなくなってしまう。

どうしてもBの未知を読む能力が求められることになる。これは、前の再認と違って、^① 下敷になるものがない。新しい世界に直面する。多少とも了解不能の部分があるはずである。その溝を飛び越えるには、想像力によるほかはない。いくらAの読みにシチュエーションしていても、それだけではBの読み方ができるとはかぎらない。両者は^② 的に違う。

読書が人間にとって未知の世界への^③ ドウニユウとなりうるのは、Bの読みができるからである。その意味でたいへん重要なものであるのに、一般にAとBとの区別がはっきりしていない。^④ AからBへの移行はどうしたらできるのか考えられることはまれである。しばしば、Aだけにとどまって、それを読書のすべてであるように錯覚してしまう。

Aの読みは、知る、という活動であるが、Bはただ、はじめから知るといわけにはいかない。まず「解釈」が必要である。こ

とばを手がかりに、未知の世界へわけ入って行く。それで何とかわかれれば、未知を既知とすることができるのである。^⑤、そういう解釈を拒むような理解の難しい表現もある。これがCの読みになる。どうしてもわかるのか。体当たりである。一度や二度ではわかるわけがない。何度でもぶつかって行く。^⑥、すこしずつだが、おぼろ気になってくる。

読書百遍意おのずから通ずというのが、このCの読み方である。おそらくそれはその人の考えにつよく色どられていると思われる。

(中略)

いまは読者に親切なる表現がつよく求められることもあって、^③ Cの読みに耐えるような本はほとんどなくなってしまっている。読

む人が自分の想像力、直観力、知識などをその限界まで総動員して、ついには、「自分の解釈」に至るといような思考的読書はきわめてすくなくなった。

読書の必要を訴える声はしばしば耳にするけれども、多くそれは^④ 量的読書である。質的に見れば、ただ知るだけのAの読み、既知の延長線上の未知を解釈するBの読み、さらにまったくの未知に挑むCの読みという三つは、はっきり別のものである。

これからさき、CをBの中へふくめて、未知を読むのと既知を読むのとの二つを区別して考えたい。

学校教育の読みはAから始まる。学習者のよく知っている内容のことばの読みを教える。既知についての読みである。この方法については現在だれも疑うものがないけれども、昔は、一足飛びに高度の未知を読ませる^⑤ 素読を力していたのを考えると、Aから始めるのが唯一の方法とは言えないことがわかる。

文字を読めるようにするのが、Aの読みである。^⑥ これがなかなか骨であるから、一応、既知が読めるようにするのも訓練を要する。そのために、ついBの読みのあることを忘れてしまう。お互いの受けたことばの教育をふりかえてみても、どこまでがAであり、どこからがBであるのか、はっきりしていない。

いつのまにかBの読みをしようとしていたのであるが、いつ、いかにして、AからBへの移行が行われたのか、明確ではない。それもそのはずである。教授者自身もそれがあいまいになっていて、いっこうに平気である。

A読みをしていたのが、突如としてB読みのできるようになるわけがない。移行の橋わたしがなくてはならない。^⑦ それに役立つのが文学作品である。国語教育において、文学作品の読解が不可欠な理由がそこにある。

物語、小説などは、一見して、読者に親しみやすい姿をしている。いかにもA読みでわかるような気がする。あまり難解であるという感じも与えない。それでは創作がA読みだけですべてがわかるか、というそうではない。作者の考えているのは、読者の知らないものであることがうすうす^⑧ サツチされる。このとき、読者は既知に助けられ、想像力によって、既知の延長線上に新しい世界をおぼろげにとらえる。こういうわけで、同じ表現が、Aで読まれるとともに、Bでも読まれることが可能になる。創作がドクトクのおぼろげを感じさせるのは、この二重読みと無関係ではあるまい。

(外山滋比古『思考の整理学』による)

注 *1 知的活動……知識や知性にかかわる活動。

*2 直観力……推理などの論理的判断によらず、ただちに対象の本質を見抜く力。

*3 素読……文章の意味は考えないで、声を出して文字だけを読むこと。漢文（中国古来の漢字ばかりで書かれた文章）を学ぶ初歩とされた。

《□の問い》

問1 ⑤⑥に入る最も適当なことをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。（同じ記号を二度以上使っては
いけません。）

ア さらに イ したがって ウ やはり エ やがて オ ないしは

問2 に当てはまる適当なことを、漢字一字で答えなさい。

問3 ①「下敷になるもの」とは何ですか。本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問4 ②「それを読書のすべてであるように錯覚してしまう」とありますが、「それ」の内容を十五字以内で答えなさい。

問5 ③「Cの読みに耐えるような本はほとんどなくなってしまっている」とは、どういうことですか。最も適当なものを
次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本の内容が難しすぎるので、未知の世界を求めていた読者も自分の解釈をできなくなっていること。

イ 読者が得た自分の解釈には限界があるので、読者の好奇心を刺激できる本がなくなっていること。

ウ 読者が苦心して自分の解釈をするまでもないほど、やさしい内容の本ばかりになっていること。

エ 読者が自分の解釈を見いだそうとして、簡単に分かりやすい内容の本ばかりを読もうとすること。

問6 ④「量的読書」とは異なった「読み方」を筆者は何とよんでいますか。本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問7 ⑤「Aから始めるのが唯一の方法とは言えない」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、
記号で答えなさい。

ア 意味がわからないまま読んでいたような文でも、くり返し読むうちに自分で考える力がつき自然と理解できるから。

イ わかることだけを教えていても学力がつかないことは明らかで、いまの学校教育は限界にきていると言えるから。

ウ わかることとわからないことを自覚させて、勉強への意欲をかきたてるのが学校教育には求められているから。

エ 高度な文章を読んでわからないという経験をする、二つの違う読みがあることに気づいて読書の幅が広がるから。

問8 ⑥「これがなかなか骨である」とありますが、ここで使われている「骨である」と同じ意味を持つ慣用句を、次の中
から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 骨惜しみる イ 骨が折れる ウ 骨に刻む エ 骨が太い

問9 ⑦「それに役立つのが文学作品である」と筆者が述べているのはどうしてですか。本文中のことは用いて六十字以
内で説明しなさい。

問10 次のア～エの中から、筆者の考えに合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読書は優れた知的活動であるが、読む側に未知を読む能力が伴っていないとどんな内容の本も本当にわかることはできな
い。

イ A・B・C三つの読みを身につければ既知と未知の知識を吸収できるので、文学作品を国語教育で取り入れていくべきで
ある。

ウ 本を数多く読むことで読書の仕方がわかるのであるから、親しみやすい物語や小説を学習することが学校教育において必
要である。

エ 現在説かれている読書の必要性は、ほとんどが量的な読書についてであり、未知を読むための工夫についてはあまり考え
られていない。

問11 ①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ついに長年にわたった僕の捨て子疑惑を明らかにする時がやってきた。へその緒一つで今までのもやもやがすっきりするのだ。やっぱり先生っていうのはすごい物知りだ。

僕は母さんが仕事から帰ってくるのを A して待ちわびた。あまりに A しすぎて炊飯器のスイッチを入れ忘れそうになったくらいだ。小学校一年生の時から、ご飯を炊くのは僕の役目になっている。

六時少し前に母さんの足音が聞こえた。僕の家はマンションの五階にあって、エレベーターを使わないのは母さんだけだから母さんの帰りはすぐにわかる。

「ねえ、へその緒見せて」

母さんがドアを開けたのと同時に、玄関に飛んでいった僕がそう言うと、母さんはしかめっ面をした。

「なんなのそれ。まずは、母さんお帰り。今日もお仕事ご苦労様。でしょう」

「母さんお帰り。ねえ、へその緒っていうの出して」

「へその緒？」

母さんはしかめっ面のまま B した。

「ほら、母さんのおなかと子どもを繋いでいるやつ」

「ほう。日本にはそんなベニリな代物があるのか」

母さんは、大人のくせにへその緒の存在をまるで知らなかったかのようにとぼけた声を出した。

「どこの家にもあるんじゃないの？ 見せてよ」

「またおかしい知識を身につけてきたのね。まったく学校ってのはろくなこと教えないねえ」

母さんは他人事のように言いながら、洗面所に向かっていってしまった。

「あるの無いの？」

ガラガラと音を立ててうがいをする母さんに向かって僕は声を張り上げた。

「あるんじゃないの。どこの家にもあるんだったら」

母さんは口をタオルで乱暴に拭いた。

「その前に夕飯夕飯。母さんが何ゆえに働くか。それは食べるため。① 人生の楽しみの半分は食にあるんだから、愛する育生のためとてそれは譲れないわ」

僕は一刻も早くへその緒を見たかったけど、母さんに従うことにした。

母さんはふわふわのオムレツとほうれん草とベーコンのサラダを作って食卓に並べた。僕はばあちゃん家でもらってきた蛸と大根の煮物をレンジで温めて、ご飯を茶碗にモった。② 夕飯の準備をする僕と母さんの息はぴったりだと思う。

「ほう、蛸が柔らかくておいしいわ」

母さんはそう言うと、向かいの席から僕の椅子を蹴って飛ばした。

「育生、C すんの止めてよ。食事の時は目の前のご飯のことと、一緒にテーブルにいる人のこと以外考えちゃダメなのよ。学校で習わなかった？ まったく青田先生は、肝心なことが抜けているのよねえ」

「違うよ。青田先生は悪くないって」

僕は慌ててヒテイした。僕の落着きのないことまで青田先生のせいにされちゃかわいそうだ。

「わかったわかった。じゃあ、ジャンピングクイズね。青田先生のためにも、育生君ががんばってください」

母さんはいつでもどこでも突然クイズを始める。そして、そのクイズはなぜかいつでもジャンピングクイズなのだ。

「さて、今、育生君も食べているその蛸ですが、柔らかく煮るためには育生君も大好きなあるものを入れます。さあ、何でしょう」

「そんなのわかんないよ」

見当もつかなかったから、僕は投げやりに言った。

「真剣に考えてください。第一のヒントを差し上げましょう。それは飲み物です」

母さんはすました口調で言った。

「飲み物……？」

僕は蛸を口に入れてゆっくり噛んでみた。醤油と砂糖とだしの味しかなかったけど、僕はとりあえず答えを出した。

「オレンジジュース？」

「違います」

母さんは首を振ると、チッチッチと時間をカウントし始めた。

「じゃあ、牛乳」

「まさかあ」

「だったら、フルーツ牛乳だ」

「牛乳じゃないって言ってるのに」

母さんはけらけら笑った。

「これ以上育生の味音痴^{おんち}ぶりを聞くのは母親としましてもつらいので、答えを発表いたします。じゃーん。なんと、この煮物に入っている飲み物とは、あの、サイダーでした」

「あのシャワシャワの？」

蛸^{たこ}のどこにもサイダーの味がなかったから僕は驚いた。

「そう、あのシャワシャワにはものを柔らかくする力があるのだよ。だから、サイダーばっか飲んでると、育生の歯もこの蛸^{たこ}みたいになっちゃうぞ」

「うわあ」

そりゃ、大変だ。この蛸^{たこ}みたいな歯になっちゃったら、じいちゃんみたいに入れ歯にしくちゃいけなくなる。僕は密かに、サイダーを飲むのは止めようと誓^{ちか}った。

「ふふふ。クイズに必死になって、これで育生もへその緒のことを忘れたかなあ」

母さんのかい独り言を聞いて僕ははっとした。まんまと騙^{だま}されるところだった。

「だめだよ。ちゃんと覚えてるんだから。ご飯終わったらすぐに見せてよね」

僕がへその緒を見ることが交換条件^{こうかん}の食器洗いをやっている間、母さんは

「育生が出てきたのって十年近く前でしょう？ どっかやっちゃってるかもしれないわ」とぶつぶつ言いながら、へその緒を探し始めた。

「これでいいのかしら」

奥^{おく}の部屋でござそしていた母さんが小さな箱を持ってやってきた。薄く模様の入った和紙で出来た箱。どこかで見たことがある。そう、この間食べた紅白饅頭^{まんじゅう}の入っていた箱だ。

「この中に入っているの？」

僕は母さんから饅頭の箱を受け取った。

「まあ、一応へその緒ってことになるわね」

「開けていい？」

「どうぞ」

③僕はそっと箱の蓋^{ふた}をつかむと、ゆっくりゆっくり開けた。

「えっ？ これ？」

中には白くて小さな欠片^{かけら}がいくつか入っていた。青田先生が見せてくれたへその緒とはまるで違うものだ。それはもっと黒かったしこんなに薄っぺらじゃなかった。

「これって……」

その欠片を手にとった僕は、それが何なのかすぐわかった。

「へその緒じゃないじゃない。これって卵の殻^{から}でしょう？」

「そうよ」

すっかりへその緒が入っているものと思い込んでいた僕は、あまりの中身の違いにパニックになってしまった。

「どういうこと？ なんで卵の殻が入っているの？」

④「母さん、育生は卵で産んだの。だから、へその緒じゃなくて、卵の殻を置いているの」

母さんはけろりとした顔でそう言った。

「そんなわけじゃない。人間は卵では生まれないんだよ」

そうだ。哺乳類^{ほにゅうるい}はお母さんのおなかから生まれてくるのだ。僕はまだ九歳^{きゅうさい}だけど、それくらいのこととはちゃんと知っている。

「育生。世は二十一世紀よ。人間が月へ飛んでいくのよ。ロボットが工場で働くのよ。コンピューターでなんでもできるこの世の中。卵で子どもを産むくらいなんでもないわよ」

母さんがまじめな顔で言うから、うそなのか本当なのかまだ九歳の僕はわからなくなった。

「でも……、でも、へその緒が親子の証^{あかし}だって。先生が言ってた」

「教師の言うことを鵜呑^{うの}みにしては、賢^{かしこ}くなれないぞ。へその緒なんてちょっと大きいスーパーに行けば、百円前後で売ってるわよ。あんなゴムチューブが証^{あかし}しだなんてそれこそびっくりだわ。よく見てよ。へその緒よりずっといかしてるでしょ？」

母さんは僕の手ごと箱を掴^{つか}むと少し傾^{かたむ}けて、僕に、もう一度中身を見せた。確かに学校で見たゴムのようなへその緒より、箱の

中に入った卵の殻のほうがいだけれども。

「じゃあ、卵の殻が僕の家の親子の証なの？」

僕が言うと、母さんは笑った。

「まさか」

「じゃあ、証しはどこ？」

「本当バカね。証しって物質じゃないから目に見えないのよ」

僕はへその緒も無いうえに母さんにバカだと笑われてショックで泣きそうになった。

「結局僕が捨て子だからでしょ？」

僕がヒステリックに言うとう母さんはやれやれという顔をした。

「仕方ないわねえ。今日は特別育生に⑤本当の親子の証しを見せてやるとするか。すぐく体力が消耗するからあんまりやりたくないんだけどなあ」

母さんはそう言いながら僕の前にしゃがみこんだ。そして、腕まくりをして、僕を思いっきり抱きしめた。母さんが力任せに僕を抱きしめたから、僕は一瞬息ができなくなってしまった。

「ね。今見えたでしょう。証し」

母さんは僕を解放すると、嬉しそうに訊いた。

「見えないよ。痛かっただけだ」

僕は本当のことを答えた。

「見えないって？ ④ シュギョウがまだまだ足りないねえ。こういうことが見えなくてはだめよ、育生。育生ももう少し大きくなったら、ちゃんと見えるようになるわ。証しとかがさ」

母さんは無責任にそう言い放つと、声を潜めて話し出した。

「それより、最近少し気になってるんだけど、育生の髪の毛、薄くなってない？ 昨日あんたが入った後お風呂に髪の毛がいっぱい抜けてたわ。へその緒とか証しとか、そういう理屈っぽいことばかり言っていると、禿げるわよ。このままいけば、そのうち⑥ ショウテンガイの金物屋のおっちゃんみたいになるわね」

僕は D した。母さんの言うとおりで。今日髪の毛を梳かしたときも、何本か毛が抜けた。金物屋のおっちゃんみたい

につるつ禿げになったら、かつらを買わなくてはいけない。入れ歯の上にかつらなんて、学校に行けないや。僕はとても不安になってきた。

「まだ大丈夫よ。なんでも早期発見が大事だから。今のうちならなんとかなるわ」

母さんはそう言ってけらけら笑うと、僕の目を覗き込んだ。

「母さんは、誰よりも育生が好き。それはそれはすごい勢いで、あなたを愛してるの。今までもこれからもずっと変わらぬよ。ねえ。他に何がある？ それで十分でしょ？」

僕は頷いた。捨て子疑惑はまるで晴れなかったけど、これ以上考えて毛が抜けたら困るから。⑥ この母さんなら卵で僕を産むこともありえるだろう。それに、とにかく母さんは僕をかなり好きなのだ。それでいいことにした。禿げないためにもそう思い込むことにした。

(瀬尾まいこ『卵の緒』による)

《問の問い》

問1 ㉔㉕のカタカナを漢字で書きなさい。

問2 A～Dに入る最も適当なことをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使っては
いけません。)

ア そわそわ イ ぎよっと ウ どきどき エ きよとんと

問3 ~~~~~⑥「投げやり」、④「鵜呑み」、③「ヒステリック」の本文中で使われている意味として、最も適当なものをそれぞれ

次の中から選び、記号で答えなさい。

⑥「投げやり」

ア 結果を考えない無責任な態度。

イ ねらいすました慎重な態度。

ウ いいかげんでえらそうな態度。

エ ものおじしない積極的な態度。

④「鵜呑み」

ア 意味がわからない言葉を知ったふりをする事。

イ 人の言葉をよく検討せずに採り入れる事。

ウ 教わった言葉をそのまま丸暗記すること。

エ 人から聞いた言葉の意味をとりちがえること。

③「ヒステリック」

ア 不安げに。

イ 冷静に。

ウ 断定的に。

エ 感情的に。

問4 —— ①「人生の楽しみの半分は食にあるんだから」とありますが、「母さん」は「食」においてどのようなことを「楽しみ」にしていますか。三十字以内で答えなさい。

②「これで育生もへその緒のことを忘れたかなあ」とありますが、この時の「母さん」の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問5

ア 捨て子疑惑だなんて、つまらないことを気にしている様子だったので、育生の不安を解消できたことに安心している。

イ 捨て子疑惑をぶつけられてあせったが、しよせんは子どもなので、たわいないクイズで育生の気をそらせたと言っている。

ウ 捨て子疑惑に対する答えは考えているので、すぐにごまかされてしまいそうな育生の子供らしいふるまいを楽しんでいる。

エ 捨て子疑惑についての話をそらすことができたので、必死に考える育生の様子を見てうまくごまかせたとほっとしている。

問6

③「僕はそっと箱の蓋をつかむと、ゆっくりゆっくり開けた」とありますが、「育生」の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これまで抱いていた捨て子疑惑がいに明らかにされると思うと、少しこわくもあり緊張している様子。

イ 調子のいいだけの母親とは何のつながりもないことがやと証明されると思うと、期待に胸が高鳴る様子。

ウ 軽い冗談のつもりが思わぬ展開になって、本当に捨て子だったらと思うと、とても不安でたまらない様子。

エ ようやく真実が明らかになり、これまでの生活が失われると思うと、心細くてさびしく感じている様子。

問7

④「母さんはけろりとした顔でそう言った」とありますが、この時の「母さん」の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手の気持ちなど無視しており、育生からするとあきれれるほど無責任な様子。

イ 子どもだからとみくびっており、育生からすると腹立たしい開き直った様子。

ウ 相手の反応を見て楽しもうとしており、育生からするとつかみ所のない様子。

エ 子どもとの成長に合わせて教育しようとしており、育生からすると頼もしい様子。

問8

⑤「本当の親子の証し」とありますが、「母さん」は「本当の親子の証し」をどのようなものと考えていますか。「」ではなく、「〜ということ。」という形式で、四十字以内で説明しなさい。

問9

⑥「この母さんなら卵で僕を産むこともありえるだろう」について、この時の「育生」の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いつもその場しのぎの言動が多く無責任な母なので、これ以上問いつめた所で話は進展しないだろうとあきらめた。

イ いつも突拍子もない言動のある変わった母だが、自分を大切にしてくれているのは確かなので、それでいいと思った。

ウ いつも知的な言動で冷静な母だが、感情的にふるまっていたので、自分を必要としてくれると分かり満足した。

エ いつも温かく優しい言動で愛情あふれた母なので、明らかに動揺している様子を見て困らせてはいけなさと反省した。

三

次の問いに答えなさい。

問1 次のア、エの（ ）には体の一部を表すことばが入ります。そのうち一つだけ他の三つと異なることばが入るものがあります。その記号と、そのことばを漢字で答えなさい。

例 ア 歩きすぎて（ ）が棒になる。

イ なかまの（ ）をひっぱる。

ウ 先方の（ ）をたてる。

エ （ ）に任せて散歩する。

答え ウ・顔

① ア 横から（ ）をはさむ。

イ 試合を前にして（ ）が鳴る。

ウ そろばんの（ ）が上がる。

エ 料理に（ ）をふるう。

② ア 彼は（ ）が低い人だ。

イ 話の（ ）を折る。

ウ 何をするにしても（ ）が重い。

エ 悲しい知らせに（ ）を疑った。

③ ア 彼の（ ）に負えない難問だ。

イ 人の話に（ ）をつっこむ。

ウ 「はてな」と（ ）をかしげる。

エ まだかまだかと（ ）を長くする。

④ ア 自慢の息子で（ ）が高い。

イ 冷たく（ ）であしらう。

ウ 成績がいいことを（ ）にかける。

エ 誠実に見えるが（ ）が黒い。

⑤ ア こまった事態で（ ）をかかえる。

イ 彼の優秀さに（ ）を巻く。

ウ 彼の話し方は（ ）に来る。

エ その努力には（ ）がさがる。

問2 次のことばと反対の意味を持つことばを、後のア、エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① とんびがたかをうむ

② 船頭多くして船山にのぼる

③ あぶはちとらず

④ 転ばぬ先の杖

⑤ 立つ鳥あとをにごさず

ア 善は急げ

イ 三人寄れば文殊の知恵

ウ 後は野となれ山となれ

エ 一石二鳥

オ うりのつるになすびはならぬ

カ 石の上にも三年

キ 後悔先に立たず

ク すずめ百までおどりわすれず

四

次の 線部のカタカナを漢字で書きなさい。

① ユウキ農業をおこなう。

② 敵に対してホウフク攻撃をする。

③ 彼はタツピツだ。

④ 近所のセントウに行く。

⑤ 皮のコートをハオる。

⑥ 鏡にウツる姿。

⑦ 暴君のアッセイに苦しむ人々。

⑧ 寺のホンゾン大切に

⑨ 簡単に用事をスませた。

⑩ 新聞のヘンシュウをする。

國語

名前

総 得 点

小計	□
----	---

小計	二
----	---

小計	三
----	---

小計	四
----	---